MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース

新着収蔵資料紹介

「色絵花卉文唐人絵皿」
長康亭道三（ちょうこうていどうさん）（1811－没年不詳）作

長康亭道三は、江戸末期から明治期にかけて秋田で作陶した人物です。磁器や楽焼など、作品数は少ないものの、優れた技術と美意識を感じさせる作品を残しました。若くしてその腕を認められ、秋田藩から寺内焼磁器窯主に抜擢されましたが、事業は短期間で失敗。その後八橋に移り住み、楽焼を焼きました。
本作は、絵付けの巧みさで知られる道三らしい逸品で、朱や緑の絵の具を用いて、のびやかな筆致で唐人画が描かれています。高台には「寿楽道三」と記されており、八橋で焼かれた晩年の作と推察されます。

CONTENTS

01 表示・目次
02 展示報告「昭和のアキター百年のくらしをつづる－」
03 展示報告「ヨシタケシンスケ展かもしれない」
04 学芸ノート「わくわくたんけん室のトリセツ「鯉のぼりのオブジェ」づくりから」
05 学芸ノート「板戸沢鉱山～秋田県唯一のスカルン型鉱床を訪ねて～」
06 学芸ノート 博物館教室「60年前の秋田～モノや写真で思い出を語り合う会～」
07 学芸ノート「本業に励む「宝暦の色男」－城絵図に残された仕事の記録－」
08 博物館の風景

NO.181

展示報告

令和７年(2025)４月26日(土)～６月15日(日)

昭和のアキタ

－百年のくらしをつづる－

昭和の時代の幕開きから今年で100年目になります。この100年は戦争や凶作、不況に翻弄された苦難の時代でもありましたが、現在に続く物質文化や新しい観念、価値観が作りだされた時代でもありました。本展覧会では、昭和のくらしに焦点をあて、時代の移り変わりを紹介し、くらしの中の道具から、ひとりひとりの歴史を感じていただくよう心がけました。

会期中にはダースコちんどん隊による昭和歌謡を奏でるイベントを実施し、130名あまりの方々に懐かしい昭和のちんどんやの雰囲気を味わっていただきました。

開催にあたり、ＮＰＯ法人秋田歴史文化伝承会をはじめ展示にご協力いただいたみなさまにこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

展示構成
第１章　昭和のはじまり
第２章　戦争の足音
第３章　復興への道
第４章　高度成長期を迎えて
第５章　広がる世界
終　章　百年のくらしをつづる

銘仙の着物と菓子包み紙
（大正～昭和初期）

愛国婦人会関連資料（昭和10年代）

湯沢尋常高等小学校の生徒が描いた
児童画（昭和14年度）

家庭用の小さな裁縫箱

こども服の型紙（昭和７年『主婦の友』
６月号付録）と再現した服

冷蔵庫と洗濯機（昭和20年代～40年代）

菓子包み紙（県内）と秋田市入川橋通登町にあった
商店のうちわ

さまざまな電化製品（昭和40年代～）

秋田犬
（勝平得之 作）

高砂堂包み紙（部分）

秋田県立博物館開館50周年記念「ヨシタケシンスケ展かもしれない」

©Shinsuke Yoshitake

2025年7月12日(土)→9月7日(日)

ヨシタケシンスケさんは、イラストレーター、絵本作家、造形作家として活躍される、大人から子どもまで大人気のクリエーターです。日常のたわいない事柄を、独自の視点で切り取った絵本は、考えさせられたり、くすっと笑えたりする内容が多いのも魅力のひとつです。そんなヨシタケシンスケワールドをきゅっと詰め込んだ展示会は、期間中の来場者が５万人を超え、子ども連れのご家族からご年配の方まで、連日多くの方で賑わいました。

入口に入る前からワクワク！

お馴染みのキャラクターに、子どもたちも大興奮!!

体験型の展示も充実♪

秋田で巡回累計100万人突破!!

秋田で描いていただいたスケッチもしっかり展示

約2500枚に及ぶスケッチ複製の数々は圧巻！

学芸ノート
curator's note

うなぎのぼり？こいのぼり？あなたが作るのは何のぼり？

わくわくたんけん室のトリセツ
「鯉のぼりの<ような>オブジェ」づくりから

受講者による作品

当館のわくわくたんけん室には簡便な描画、工作の体験メニューが用意されています。常設されていない民俗、工芸両部門の紹介と他の展示室へのアプローチとなるように考慮された教材で、安価な代替素材を使って疑似体験するものもあります。パンデミックによってわくわくたんけん室の接触型展示を見直すことになり、これまでの教具教材についても改良、新調する方向で検討が進められています。

先年、人気メニューの「紙のタタミ染め」で使用する純色の染料を日本の伝統色（萌黄（もえぎ）、赤花（あかはな）、中青（なかあお）など）に調色し、日本人の色彩感覚、季節感を再認識する「シン・タタミ染め」として実施しました。体験メニューの定番である塗り絵は「スケッチ教室」や「葉っぱプリント」をメニューに加えて、自然を観察し、自分で描く作るという自発的な創作行為と結びつけるようにしてきました。さらに職人によるコケシ、樺細工制作のワークショップも実施し、秋田の伝統工芸に直接触れ合う機会、実際の素材を使った体験を提供できるようになりました。

わくわくたんけん室は子どもが対象だからと、安易な教具教材を提供すべきではないと考えます。本物、本物に近い素材を提供することは体験として重要であり、大人たちも博物館が「本質」にこだわる姿勢、関わり方を提供すれば納得し、関心を寄せてくれるはずです。児童生徒にまで対象を拡げて本格的で専門的な博物館教室を増やすことが当館には必要に思えます。

幸いわくわくたんけん室は入口から近く注目度も高いです。人だかりを作れば、さらなる来場者の興味関心を惹き、新しい博物館の魅力を伝えられます。そう考えて目立ちにくい学習室、実験教室で行われている博物館教室をわくわくたんけん室で試行しています。

「鯉のぼりの<ような>オブジェ」づくりは昨年の木工芸の教室で残った、捨てるしかないと諦めていた端材を使ったスペシャルプログラムです。実施日により鯉のぼりのアイディアが浮かび、接着してモザイクウッドにすることで木色と木目の美しさが際立つものになりました。

知人から提供を受けた県産の木材（山桜、槐、胡桃など）、蜜蝋（にかほ産と潟上産）を使うことで、単に造形活動ではなく受講者は身近な自然の恵みを実感し、ものづくりの本質を体験することができます。わくわくたんけん室で実施される新たな体験メニューは博物館の多様な活用法を伝える手段の一つになりつつあるのではないでしょうか。

（工芸部門：山本丈志）

5/5（月・祝）
ゲキムズ★5

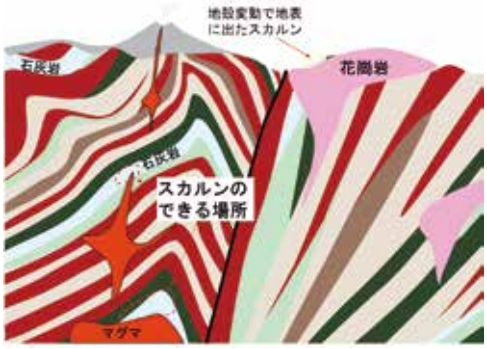
※2025年5月5日に実施しました。

板戸沢鉱山～秋田県唯一のスカルン型鉱床を訪ねて～

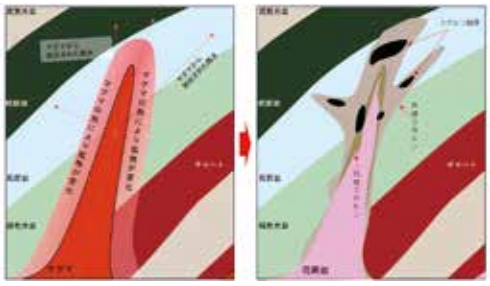
学芸ノート curator's note

秋田県は地下資源に恵まれた全国屈指の鉱山県です。金や銀、銅、鉛、亜鉛などの金属資源に加え硫黄や硫酸バリウムなどの非金属資源、そして石油、天然ガス、石炭などの燃料資源を産しました。

秋田県にはかつて200を超える鉱山が存在しましたが、これらの大部分は鉱脈型鉱床と黒鉱鉱床に属します。これらの鉱床は何れも熱水と呼ばれるマグマに含まれる水（マグマ水）やマグマの熱により温められた地下水によって作り出されます。これらの熱水が地下の割れ目に流れ込み、金属を含んだ鉱物を沈殿させてできたものが鉱脈型鉱床であり、熱水が海底に噴出し、金属を含んだ鉱物を沈殿させてできたものが黒鉱鉱床です。そして、これ以外の鉱床は噴気性硫黄鉱床や鉱染状硫黄鉱床、温泉沈殿性鉱床（褐鉄鉱、珪石、石灰）、漂砂鉱床（砂金、砂鉄）スカルン鉱床（接触交代鉱床）などがあります。しかしその数は少なく、特にスカルン型鉱床は県内では鹿角の板戸沢鉱山に限られます。



スカルン型鉱床の形成場


スカルン型鉱床の概念図

スカルン型鉱床は地下深部に貫入したマグマの熱や放出される熱水によって石灰岩や貫入岩自体が変成及び熱水変質を受けて形成される鉱床です。岩手県の釜石鉱山や岐阜県の神岡鉱山などが有名です。板戸沢鉱山は明治27年頃に発見され、大正７年から１年ほど採掘が行われた鉄鉱山です。以降の開発に関する記録は残っていません。鉱山の周辺にはジュラ系の付加体とそれに貫入する新第三系の花崗岩が分布します。板戸沢鉱山に関する文献や研究例は乏しく、鉱石の標本はほとんど存在していません。

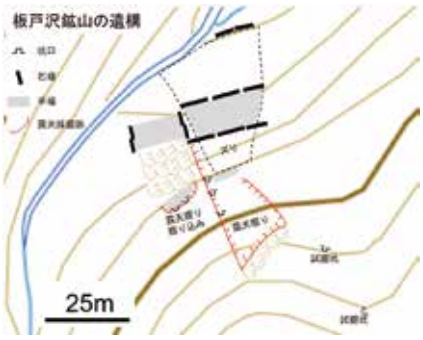
板戸沢鉱山の鉱石（館蔵）

当館では、明治期から大正期にかけて収集された鉱物の組標本（寄贈品）に親指大ほどの磁鉄鉱塊が含まれ、この一点のみが板戸沢鉱山の標本となっています。そのため秋田県でも唯一のスカルン鉱山の施設の把握や、鉱石標本などの採取を行うため調査を行いました。

確認された鉱山遺構は石垣や平場と小規模な露天掘り（20m × 10m × 1 m）、坑口、坑道（長さ３m 以下）、試掘坑などでした。ズリは大部分が露天掘りに伴うもので、鉱石はほとんど含まれませんでした。遺構の規模から採掘の準備も含めた稼行期間はおそらく数年であると推定されます。鉱山遺構の保存状態は比較的良好で、鉱業遺産としての価値は十分あるでしょう。今回現地で採取した鉱石に含まれる鉱石鉱物の大部分は磁鉄鉱で、そのほか赤鉄鉱や黄鉄鉱が少量含まれていました。脈石鉱物は灰鉄輝石及び緑簾石（りょくれんせき）、石英で柘榴石（ざくろいし）に関しては発見することができませんでした。

秋田県には多くの鉱山がありましたが、その多くが閉山して久しく、遺構や鉱山跡地が山に戻っています。今回の調査で遺構の確認と鉱石等のサンプリングを行うことができたのは非常に幸いでした。

（地質部門：鈴木照洋）



板戸沢鉱山の現況

坑口と露天掘り跡

塊状磁鉄鉱石（左）と縞状スカルン鉱石（右）

学芸ノート curator's note

博物館教室
「60年前の秋田～モノや写真で思い出を語り合う会～」

秋田県立博物館では、令和２年度から浅野朝秋氏（秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻　准教授）を講師にお迎えして、当館の収蔵資料を用いて地域回想法を実施しています。地域回想法は、身近な地域の社会資源を活用して交流の機会をつくり、人の絆を育み、生き生きとした『町づくり』に貢献する社会参加を目指すものです。また地域回想法は、自身の生活の歴史を次世代に伝える継承の場でもあります。伝える役割を担い、自分の人生を肯定的に捉えることによって、健やかで豊かな人生を歩み続けることを支援する、介護予防の手段の一つとなります。

ここでは、令和６年10月５日と11月16日に行われた博物館教室「60年前（昭和39年）の秋田～モノや写真で思い出を語り合う会～」の様子を紹介します。この教室では、講師の浅野先生が、地域回想法の意味や効果を説明し、その後、昭和39年の新聞記事や写真を用いて、当時の秋田県の様子を参加者の皆さんと語り合います。ここで、浅野先生が、「講師はあくまでも司会役で、題材（話題）を提供し、主役は参加者の皆さんです」ということを強調されます。

昭和39年の秋田県は、東京オリンピックで大いに盛り上がりました。秋田県出身の選手が15人も出場しました。開会式で選手宣誓を行ったのが体操競技の小野喬選手、日本人で最初にメダルを獲得したのが重量挙げ競技の一ノ関史郎選手でした。また、体操競技の男子個人種目総合で金、平行棒で金、床で銀、団体で金メダル獲得に貢献した遠藤幸雄選手、体操団体競技で金メダルの小野喬選手、体操競技女子団体で銅メダルの千葉吟子、小野清子の両選手、男子バレーボールで銅メダルの菅原貞敬選手。秋田県出身選手の活躍に県民も熱狂しました。その選手の活躍ぶりを伝えたのがテレビです。テレビを見るために繁華街の人通りも少なく、商店や工場も臨時休業になりました。今回の博物館教室では、昭和39年に購入したテレビを展示しました。このテレビを寄贈してくださった方が「兄とテレビにシールを貼った」とおっしゃっていました。参加者の方からは、「家にテレビがなかったので、近所に見に行った」「見ないときは、布をかぶせていた」という当時を懐かしむ話がありました。

アルマイトの弁当箱の資料では、「冬に学校のストーブで弁当箱を温めるとおかずの臭いが教室中に充満した」「冬の弁当のおかずはハタハタだった」などまるで学生時代に戻ったように生き生きと語っていました。

それぞれの資料について参加者のみなさんが、思い出を語り、うなずき合ったり、「自分も同じ体験をした」などと振り返り、参加者同士での交流も深まりました。

その後の参加者の方のアンケートでは、「参加者の方の話が面白い。テレビでも全国的な話題の番組が多いので秋田の話が聞けてよかった」「高校卒業後、県外の大学に進学し、県外で就職し、数十年振りに秋田県に戻って来て、懐かしかった」等のお声をいただきました。教室を終えた参加者の方からは、充実感と満足感が伝わってきました。

（民俗部門：深浦真人）

講師の浅野朝秋先生

昭和39年製造のカラーテレビ

本業に励む「宝暦の色男」
― 城絵図に残された仕事の記録 ―

学芸ノート curator's note

寛政９年（1797）５月、火災が起こり久保田城の本丸北方が焼失しました。図１は、焼失した建物の再建を幕府へ申請するために作成された絵図の一部です。赤く塗られた焼失区域には、現在、御隅櫓が建てられている場所も含まれています。

この絵図の裏面には、次のような内容が記された書付（図２）が貼付されています。

・焼失した建物のうち、櫓は明確に描かれているが、多聞長屋と塀はよく分からないので、位置や焼失規模を明記して絵図を再提出すること。略図（図３）はその記入例である。以上は、「前田左兵衛様」からの指示である。

この書付の指示が反映されていないため、表面の絵図は修正前のものと考えられます。また、絵図の作成時期は寛政９年閏７月となっていますが、『御亀鑑』（９代藩主佐竹義和の時代の事跡を記録した編纂史料）の記事によると、同年11月付の絵図が幕府へ提出されています。このことからも、絵図が後に修正されたことが裏付けられます。

では、裏面の書付は一体誰が書いたのでしょうか。この点を推理する上で手がかりとなるのが、江戸時代の城郭修築申請の手順です。秋田藩では幕府へ城郭修築を申請する際、境目方という組織が城絵図の原案を作成しました。境目方は絵図原案を江戸藩邸へ送り、幕府への修築申請を依頼します。江戸藩邸の留守居（江戸に常駐して渉外を担当した藩士）は、幕府右筆による事前点検を経て絵図や必要書類を仕上げ、老中へ提出します。以上の流れを踏まえると、書付の差出人は江戸の留守居、宛先は国元の境目方ではないかと推測されます。

ここで、先ほど紹介した『御亀鑑』の記事を改めて確認します。本丸北方の再建を申請する絵図は、寛政９年11月17日に幕府老中へ提出されましたが、その日の記事に次の内容が記されています。

・表御右筆「前田左兵衛殿」のもとへ、留守居の「平沢平角」が事前に絵図や書類の原案を持参し、内々に相談を行い指図を受けていた。

これで前田左兵衛の正体が判明しました。書付に記された内容は、やはり幕府右筆からの指示でした。そして、その指示を直接聞いたのが江戸留守居の平沢平角ですので、国元の境目方へ書付を送ったのも平沢であったと考えられます。ちなみに平角は通称であり、実名は常富といいます。

平沢常富は、朋誠堂喜三二などと名乗って活動した、江戸の人気作家でもありました。今年のＮＨＫ大河ドラマにも登場したため、ご存じの方も多いでしょう。吉原での遊興を題材とした作品も著しており、遊び人のイメージが強い喜三二ですが、表の顔は留守居などを務めた江戸詰の秋田藩士です。今回紹介した書付と略図が常富直筆のものである、とまでは断言できませんが、作成に大きく関与していたことには間違いありません。幕府と藩との間で連絡調整に奔走した、朋誠堂喜三二こと平沢常富の一面を垣間見ることのできる貴重な資料といえるでしょう。

（歴史部門：黒川陽介）

図１　寛政９年「出羽国秋田居城絵図」の部分図（当館所蔵）

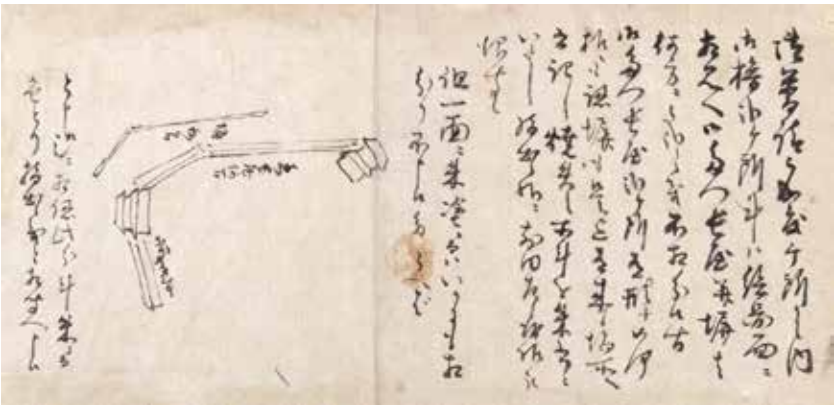


図２　図１の絵図の裏面に貼付された書付

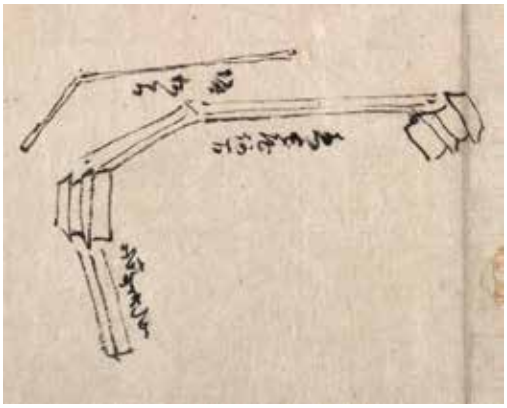


図３　図２に記された焼失区域の略図

博物館の風景

博物館教室

綿を紡ぐ

県立大学で綿の育て方を学びました。この講座では、自分で育てた綿から糸を紡ぎ、布に仕上げます。昔ながらの手仕事で、糸車や織機を使います。完成は２月頃の予定です。

化石と地層の観察会

男鹿市安田海岸での地層の観察を通して大地の成り立ちを学んだ後、採取した貝化石を使って標本づくりを体験しました。

My Jomon Cup

縄文土器やその文様を学び、これを取り入れながら、陶芸用粘土を材料に、縄文土器の作り方でオリジナルのコーヒーカップを作りました。

貝輪をつくる

柏子所（かしごどころ）貝塚で出土した貝輪について学び、実際にベンケイガイの貝輪を制作して縄文時代のアクセサリーやものづくりについて理解を深めました。

昆虫教室－採集と標本づくり－

小泉潟公園で昆虫採集を行い、その後、標本づくりをしました。種類を詳しく調べ、ラベルをつけて、自作の昆虫標本を完成させました。

「真澄に学ぶ教室」講読会

江戸時代の紀行家菅江真澄がのこした日記のうち県外に関するものを取り上げ、日記の概要を確認し、主な内容などを声に出して原文を読みました。

絵本制作 博物館歳時記 秋の章

博物館周辺で採集した植物をじっくり観察しながら写生し、身近な自然を作品にしました。受講生の作品を集めて編集し、素敵な絵本に仕上げます。

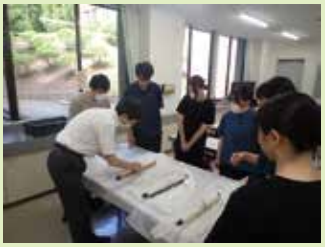
イベント・行事

昭和を奏でる

博物館ロビーにチンドン屋がやってきて、賑やかでどこか懐かしい音色を聴かせてくれました。企画展「昭和のアキタ」の付帯事業です。

教員のための博物館の日

学校の先生方に博物館の魅力や利用方法を知ってもらい、学校教育の場で活用していただくことを目的に実施しました。



博物館実務実習

９月３日から計６日間の日程で、実務実習を行いました。学芸員資格を取得するために県内外から８名の学生が本館を訪れ、様々な資料の取り扱いなどの実務を学びました。

わくわくおはなし会

毎月最終日曜日に博物館ボランティア「アイリスの会」のメンバーが大型絵本や組木絵本、秋田にまつわるお話などの読み聞かせを行っています。

木地山こけしの絵付け体験

こけし工人の藤原勝郎さんにご協力いただき、わくわくたんけん室で絵付け体験を実施しました。伝統的な絵柄を参考にしながら、自分だけの個性的なこけしを完成させました。

秋田の羊でヒツジをつくろう

県内のめん羊牧場について学んだ後、そこで育てられた羊の毛を使って、オリジナルデザインのヒツジブローチをつくりました。

『軒の山吹』再現

菅江真澄が記録した、家の軒先に山吹の花を飾る金足地区に伝わる行事を分館旧奈良家住宅（重要文化財）に再現しました。

秋田県立博物館ニュース　No.181　2025.11.4発行
編集・発行　秋田県立博物館

〒010-0124　秋田県秋田市金足鳥崎字後山52
TEL：018-873-4121 ／ FAX：018-873-4123
E-mail：info@akihaku.jp
ホームページは「秋田県立博物館」で検索

秋田県立博物館